

# 見てみよう！歴史地震記録と旬のあいち

January 2016 vol.21

January						
S	M	T	W	T	F	S
						1 2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
						31

## ◆ 妙喜寺

所在地：西尾市江原町

交通：名鉄西尾線「西尾口」駅 東約 2.5km

昭和 20 (1945) 年に発生した三河地震は戦争中の地震で、当時は多くの児童が地方の寺院などに疎開していました。西尾市江原町にある妙喜寺も疎開先のひとつで、名古屋市中区の大井国民学校（現・平和小学校）から、約 30 人の児童を受け入れていました。

三河地震が襲ったのは昭和 20 年 1 月 13 日の午前 3 時 38 分です。マグニチュード 6.8・深溝一横須賀断層の活動により発生した直下型のこの地震により、愛知県では最大震度 7 を記録し、妙喜寺のあった江原町では 136 世帯のうち半数以上が全壊に至り、約 60 名が犠牲になっています。

妙喜寺では、激しい揺れによって本堂と庫裏が倒壊しました。地震の発生は夜中のことであり、本堂には大井国民学校から疎開していた児童と教師が寝ていましたが、地震により倒壊した建物の下敷きになり、児童 12 名と教師 1 名が命を落としています。同校の児童は周辺の別のふたつの寺にも寄宿しており、計 31 名の児童が亡くなっています。また、庫裏では当時 1 歳 2 か月だった現在の住職とその家族が寝ており、住職のお姉さんが、かもいに頭を打ちつけ命を落としています。

当時の大井国民学校の校長が書いた日記には、「午前 3 時 30 分頃強震あり 早朝三和村（現西尾市）へ向へど電車不通 中略 父兄幹部と自転車にて三和村に向ふ 4 時半到着」とあり、状況確認に自転車で現地へ向かった様子が残されています。

本堂を失った妙喜寺では、すぐに仮本堂が建てられ、地震発生以来、毎年 1 月 13 日には犠牲者を悼む法要が行なわれてきました。その後、平成 15 年になり、ようやく本堂が再建されますが、それまで使われていた仮の本堂は残され、現在では亡くなった疎開児童を供養する地藏が納められています。

妙喜寺には、地震の際にできた 10 メートルにも及ぶ地割れ跡が残っています。現在では、この生々しい地震の記録が風化しないようにと地割れ跡の上に上屋を設け保存されており、地震の激しさを示す遺構として残されています。寺は放課後の遊び場として小学生に開放され、毎週たくさんの児童が訪れており、保存された地割れを見て震災のことを初めて知る子どもも少なくないということです。

実際に被災され、姉を亡くした住職は、新聞のインタビューで「若い人に 70 年前の地震のことを言葉で伝えるのは難しい。生々しい体験をした被災者が亡くなっていくなか、子どもたちに身近な場所で大きな災害があったことを、断層の存在を通して伝えたい」（平成 27 年 1 月 13 日・日本経済新聞『幻の震災語り継ぐ』）と語っており、妙喜寺は「震災を後世に伝えたい」という強い思いが感じられる史跡となっています。

保存された仮本堂や断層による地割れの跡を目にし、震災当時の状況に思いを巡らせてみてください。



妙喜寺に残る地割れ跡



◆ 地震にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、地震が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

## ◆ 妙喜寺の周辺には…

### ● 小島龍宮社

所在地：西尾市小島町山内

交通：名鉄西尾線「桜町前」駅東約3km

昭和20(1945)年三河地震による断層痕跡が残る神社です。痕跡は神社拝殿を左右に横切る形で、拝殿床下の旧コンクリート製側溝に確認されています。(拝殿床下のため、断層痕跡は通常非公開です)



### ● 薬師堂 (戦死震災者之碑)

所在地：西尾市高河原町

交通：名鉄西尾線「西尾」駅南東約2.5km



この碑は、戦死者と昭和20年三河地震による震災死亡者の両方が祀ってあります。このうち裏面には震災関係の死者として20人の名前が刻まれています。



◆ 詳細な地図は『歴史地震記録に学ぶ防災・減災サイト』(<http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/index.html>)をご覧ください。

## ★ てんてこ祭

てんてこ祭は、西尾市熱池町の熱池八幡社で毎年1月3日に行われる五穀豊穡を祈念するお祭です。貞観元(859)年に、清和天皇の命によりこの地に熱池八幡社が造営された際のお田植神事が起源とされており、地元の豊年祭として伝わっています。

当日は、全身赤い衣装の厄男が大根で作った男性のシンボルを腰に付け、太鼓に合わせて躍らせながら町内や神社境内を練り歩きます。境内では、かぶると厄除けになると言われる藁灰を竹箒で撒き散らし、その後神殿にて神事が執り行われます。腰をふり大根を躍らせながら町中を練り歩く様子から「天下の奇祭」と言われており、その際の太鼓の「てんてこてん」という音色から「てんてこ祭」と呼ばれています。



腰につける大根は、穀物は天と地の恵み・神様のおかげで実ると信じられていた頃の名残であり、豊作への祈り、作柄への期待が託されていたものです。

### 1月のあいちの花

平成28年1月のあいちの花はピンポンマムです。ピンポンマムは、花の形状に由来する呼び方で、卓球の球に似た形状のキクのことです。マムは菊の洋名で、オランダで開発された品種と言われています。



咲いた姿がきれいな球状で、まるでピンポン玉のようであるため、このように呼ばれています。

愛らしい形から、結婚式の髪飾りやブーケなどによく用いられます。

## ● ブレイクタイム ●

### ♪ 西尾の抹茶

西尾は日本有数の抹茶生産地です。抹茶生産の始まりは13世紀頃で、当初は僧侶や貴族に愛飲されていました。江戸時代になるとお茶の栽培が奨励され広まり、明治に入ると、京都の宇治から茶種と製茶技術が持ち込まれ、抹茶の生産が本格化します。

現在では日本でも有数の抹茶の産地となっており、抹茶の栽培、製茶工場見学、茶室体験やカフェ・抹茶を使ったお菓子など、独自の抹茶の文化を満喫することができます。なお、「西尾の抹茶」は地域ブランドとして特許庁により認定されています。

西尾市観光協会  
HPより



西尾の抹茶のブランドマーク

◆ この地域の地震・津波に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、[gensaisan2014@gmail.com](mailto:gensaisan2014@gmail.com) まで情報をお寄せください。

◆ 県内の歴史地震記録をホームページで紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『歴史地震記録に学ぶ防災・減災サイト』(<http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/index.html>) をぜひご覧ください。

(発行：減齋の会(仮称)・名古屋大学減災連携研究センター 平成28年1月)